

1910年の日英博覧会日本庭園の歴史と現状について

A Report on the History of and the Present Condition of a Japanese Garden
from the Japan-British Exhibition of 1910

大出 英子
(Eiko OIDE)

はじめに

ロンドンの西部、ハマースミス&フラム区（以後「HS&F区」に省略）のシェファーズ・ブッシュに、区の施設「ハマースミスパーク」がある。ハマースミスパークは、テニスコートやローンボールコート、運動場などの運動施設と、子ども用遊具を備えた公園や花壇植栽などの公園施設としての機能があり、その中に、1910年に開催された日英博覧会のために造成された日本庭園の一部が現在も残されている。1910年の日英博覧会に日本庭園が造成されたことは、佐藤²⁾や小林⁴⁾など日本でも知られているが、現存することを知る日本人は少なく、2006年に日本造園学会によりまとめられた「海外の日本庭園」の中にも取り上げられていない。

2010年は日英博覧会開催から100年目の年となるため、2010年に向けて、在英日本人グループやロンドンのジャパンソサエティ、HS&F区が中心となり、シンポジウムや展覧会、日本庭園補修などを行う「日英博覧会100周年記念事業」を立ち上げることになった。



図1 1910年日英博覧会会場ホワイトシティ俯瞰図¹²⁾

そこで、日本国内ではほとんど知られていない日英博覧会日本庭園の現状について調査を行うことにした。

I. 1910年日英博覧会日本庭園の概要

(1) 日英博覧会とホワイトシティ

日英博覧会は、1910年（明治43年）5月14日から10月29日までの169日間にわたり、現在のロンドンHS&F区シェファーズブッシュの、当時「ホワイトシティ」と呼ばれた博覧会施設において開催された。

その当時は、万国博覧会（以後「万博」に省略）流行りの時代で、1851年にロンドンで史上初の万博が開催されて以来、パリ、ウィーン、フィラデルフィアなど世界各地で次々に開催され、いずれも大成功を収めていた。しかし、日英博覧会は世界各国を対象とする万博とは異なり、主に日本とイギリスの二国間の相互関係をより深める目的の親善博覧会ともいべきもので、日本にとっては1902年（明治35年）1月に締結された日英同盟（1921年大正10年12月まで存続）をより強固なものとし、併せて日本の文化や産業を英国に紹介し日本への理解を深めようとするものであったとされる²⁾。しかし、二国のみ博覧会であったにもかかわらず、日



図2 1910年日英博覧会日本庭園（浮島園）¹²⁾

本はこの博覧会のために、博覧会参加費用としてそれまでで最高額の208万円をかけており、日本がこの博覧会をどれだけ重視していたかをうかがい知ることができる⁵⁾。

しかし、日本がそれだけ力を入れた博覧会であったにもかかわらず、実はそのスタートは思わぬ悪条件に見舞われた。

当初、開会式の日程は5月12日に決められ、盛大な開会式が挙行される予定になっていたが、開催直前の5月6日にイギリス国王エドワード七世が突然崩御し、開会式は中止となり、博覧会の開催自体は2日遅れの5月14日に延期された。また、新聞や雑誌は服喪中の祝祭気分を控えるために博覧会の記事の掲載を控えることになった³⁾。

しかし、博覧会は予想に反して開会当初からの大盛況となり、最終的には、9月24日の「日本祭」には一日で46万人以上の来場者が、開催期間を通しては835万人もの来場者があるなど、イギリス国内で開催された博覧会の中でも大きな成功を収める結果となった。ちなみに、1908年に同じ場所で開催された英仏博覧会は、171日間の開催で、約850万人の来場者であった³⁾。



図3 ホワイトシティー コート・オブ・オーナー¹²⁾



図4 フリップ・フラップ¹²⁾



図5 マウンテン・レイルウェイ¹²⁾

日英博覧会の会場となったホワイトシティーは、ユダヤ系ハンガリー移民の博覧会興行師イムラ・キラルフィーの所有する博覧会専門の会場で、140エーカー（約56ha）もの広大な敷地に、真っ白なヒンズー様式の展示用建築物を中心に、運動競技場（スタジアム）や、フリップフラップ、マウンテン・レイルウェイなどの遊戯施設が建っていた。「ホワイトシティー」が示すように、建築物の多くは白でまとめられていた⁵⁾。

ホワイトシティーのオーナーであるイムラ・キラルフィーは、1890年代からアメリカ合衆国で開催された博覧会を主催するなどして活躍した、その当時のイギリスでもっとも有力な興行師で、1903年にシェファーズブッシュの土地を購入し、博覧会を開催するための施設「ホワイトシティー」を造成した。

ホワイトシティーで最初に開催された博覧会は1908年の英仏博覧会で、その同じ年にロンドンオリンピックの会場にもなっている。

1910年の日英博覧会開催にあたっては、キラルフィーが英仏博覧会の施設を利用して日本の博覧会を開催することを計画し、当時の駐英日本大使であった小村寿太郎に打診したことが大きく働いていると言われている³⁾。

当時、イギリスやフランス、アメリカなどの列強国が次々と国際レベルの万博を開催し、万博を開催することは列強国であることの誇示ともなっていた。1905年に日露戦争で勝利し、世界に存在を示したいと考えて日本は、日本国内での万博開催を強く希望し準備を進めていたが、1908年に財政上の問題で開催を見送る決定を下していた。

かつて日本が最も重視した外交関係のひとつに日英関係があり、1858年には日英修好通商条約が、1902（明治35）年には日英同盟（軍事同盟）が締結された。しかし、1908年頃にはイギリスの対日意識は低下し、小村寿太郎はこれを憂っていた。

そこにキラルフィーからの博覧会開催の提案があり、小村はイギリス国民の対日世論を高揚させるべく日英博覧会の開催を企画し、本国政府に強く働きかけた。

当時の日本は米国から数年来にわたって日米博の開催を要請されていたが、日英同盟による関係性が日露戦争の勝利の遠因となるなど英国との関係は米国以上に重要なものとなり、より一層の日英関係の発展を期し、米国をさしおいて日英博の開催を決定した。

そして、まもなく外務大臣に就任した小村寿太郎の指導のもと、きわめて短期間のうちに、1910（明治43）年にはロンドン市内シェフィールド地区において大規模な日英博が開催されることになった。

そのような背景があり、日本は威信をかけて日英博覧会の開催にあたることになったのである。

しかし、企業家であるキラルフィーの描いた博覧会像は、博覧会としてよりも極東の日本という国を見世物にして儲る「日本博覧会」であったのに対し、小村寿太郎をはじめとする日本政府はイギリスと対等の国として、見世物色を一掃した「日英博覧会」を描いており、両者の描く博覧会像には大きな隔たりがあった。また、「日英博」でありながら、イギリス国内からの参加は

日本が求めていたほどに多くはなく、またイギリス政府の支援も思うように得られず、このことが、日英博覧会に対する日本とイギリスの評価の違いとして表れ、イギリスをはじめとする西欧諸国ではおおむね好評であったにもかかわらず、日本では軒並べて不評となった³⁾。

博覧会では、主要な展示館として産業宮、歴史宮、芸術宮などを設け、当時の革新的な産業技術や多くの物産品および国宝級の美術品が日本から運び込まれた。建物や庭園も日本から材料を運び込み建てられた。

京都館の入り口には勅使門が造られ、その他にも春日門や、山林局出展の書院、正金銀行出展の城の三重門などの建築物が設けられた。

また、日英博覧会事務局出展の大徳寺唐門、および巖島神社のそれぞれ20分の1の模型、および日本庭園内には東京市出展の幅12尺(約3.6m)、奥行7尺(2.1m)の庭園模型2個が展示され、高評を博した。特に高評だったのは日本の美術と建築の模型、日本庭園だと言われている。

日本庭園が独立した展示物として博覧会に造られたのはヨーロッパでは初めてであり、造園史上注目すべきものであった。1910年以降に造られたヨーロッパの日本庭園のいくつか、例えばイギリスのタットンパークやオランダのクリンゲンダール日本庭園などは、この日英博覧会場の日本庭園を見て感銘し、それを取り入れたものとされている⁸⁾。

また、これら公式な出展物の他に、観客を楽しませるための余興区域が設けられ、伝統的な日本の姿を紹介する日本村やアイヌ村が作られ、そこで古来の日本やアイヌの生活や文化を再現したほか、職人による工芸品の実演販売などが行われた。



図6 京都館勅使門

(2) 日英博覧会の日本庭園

博覧会では、日本庭園が2か所に造成された。一つは会場入り口近くの「甲園」、もう一つは会場奥の「乙園」で、甲園は「平和園 (The Garden of Peace)」、乙園は「浮島園 (The Garden of the Floating Islands)」と呼ばれた (以後、甲園を「平和園」、乙園を「浮島園」とする)。

現在、ハマースミスパークに残る日本庭園はそのうちの「平和園」である。

日英博覧会事務局は日本庭園を「我国園芸趣味の真粋を發揮せしむる」ものにしようと、当時、日本庭園設計の大家とされた小沢圭次郎、本多錦吉郎、清水仁三郎、井沢半之助の4名それぞれに設計を依頼し、各々の案を出させた。事務局はこれらの案を審議した結果、平和園は小沢圭次郎案を、浮島園は本多錦吉郎案を採用し、工事にあたっては井沢半之助を現地に派遣し、現地の状況と原案を斟酌しながら築造することにした。

小沢は、イギリスでの設計の上で困難なこととして、

「1. 石を使用し難きこと、2. 土を十分に使用すること能わざること、3. 高さ1丈以上の樹木を輸出す可らざること」の3点を挙げ、水は十分使えるようであるから、水を主体にして園を設計したと述べている。そして、その園の説明書によれば、平和園は山水造り (築山泉水造) とし、山を築いて瀑布を落としてこれを流れの水源とするものとし、浮島園は平地造り (平庭造) とし、吹出井筒を水源とし遣水と野筋の形を作るものとしたとされる²⁾。

なお、園内の構築物や工作物の設計は、事務局嘱託農商務技師の榎本惣太郎が行った。

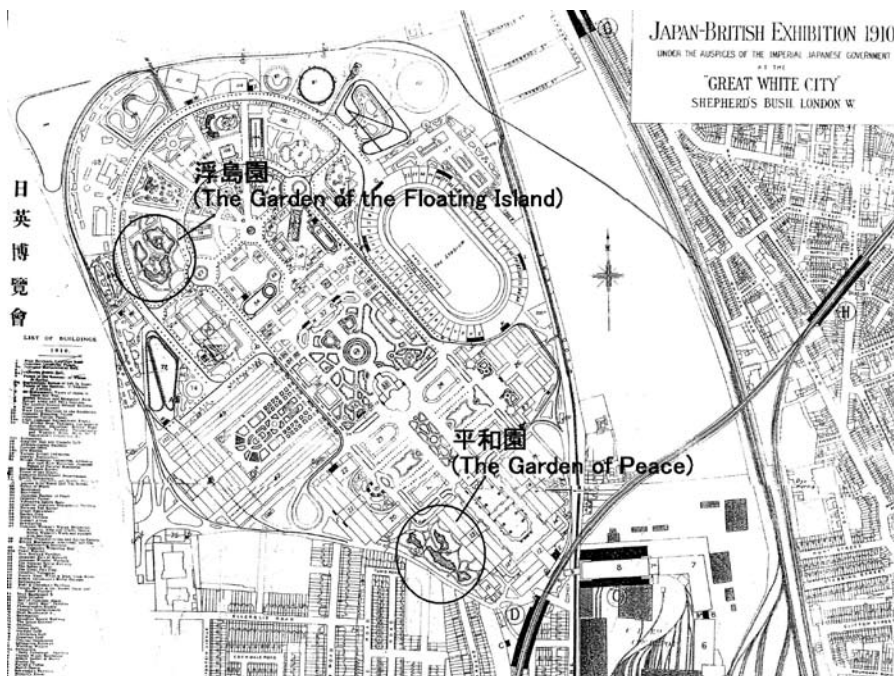


図7 日英博覧会会場図

明治42年11月下旬、工事担当の井沢半之助は、植木職人3名、大工4名を連れて日本を出発し、12月19日にイギリスに到着すると直ちに工事に着手した。その時期のロンドンでは地表が氷結するほどの極寒で、池の掘削作業などに困難を極める状況だったが、工事にあたっては約100人の英国人職人が動員され、一日も休むことなく工事は推し進められ、5月11日にはすべての工事が完了した。

平和園の水亭、四阿、園生宮、反り橋や、浮島園の棧堂、楼門、四阿、茶室など、園内に設けた建築物は、切り組んだ材料を日本から送り造った。

庭石は、英国産のものを購入し、ダービシャー産の「レッド・ストーン」と、それよりも色合いの薄いデボン州モレカンベ産の石が使われた¹¹⁾。

樹木や下草などはイギリスにない物や価格の高いものは、日本から輸送し植栽された⁶⁾。

日本からは、モウソウチク、ホテイチク、シホウチク、キッコウチクなどの竹笹類、センイリカエデ、手向山楓、野村楓、ヤマモミジなどのモミジカエデ類、コウヤマキ、ソテツ、チャボヒバ、などが持ち込まれた。

イギリス国内では、ニレ、ハクウンボク、マツ、シャクナゲ、アオキ、アジサイ、ナンテンなどが調達された。

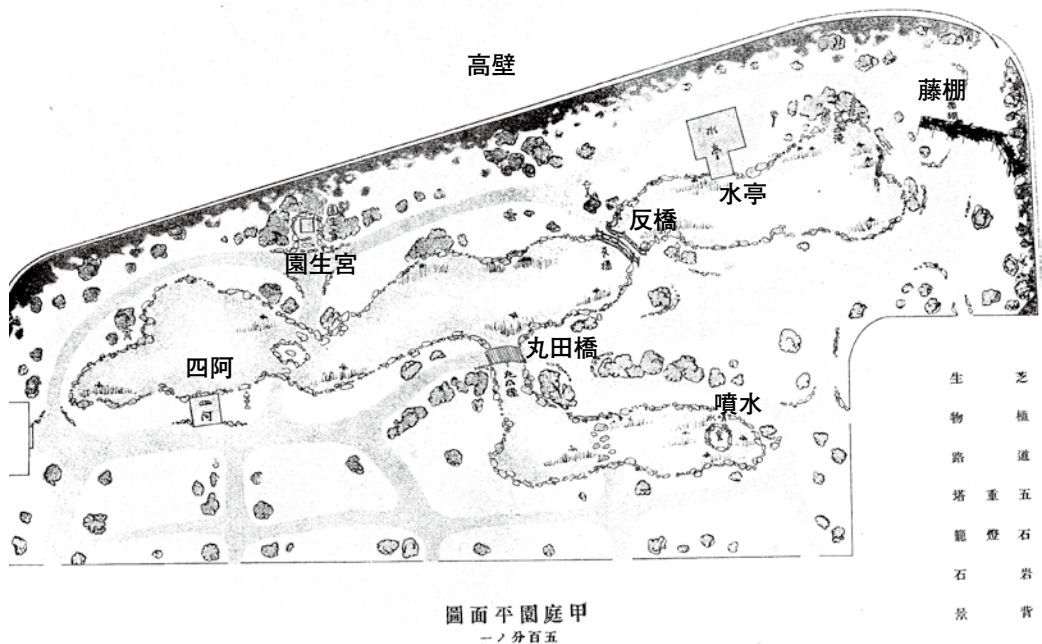


図8 平和園平面図



図9 平和園（水亭の背面は風景を描いた高壁）

① 平和園

平和園は北西方向に細長く、長さ約150m、幅約60m、面積3,020坪（約9,984㎡）の庭園で、敷地内の既存の樹木を生かした設計がなされた。

面積360坪（約1190㎡）の池は高低2段の面に仕上げられ、中島一か所、噴水一か所、高さ12尺（約3.6m）幅3尺（0.9m）で二段落の滝1か所、反り橋、丸木橋各一か所が設けられた。

また、池の西南には高さ36尺（約10.9m）の高壁が総面積530面坪にもわたり巡らされ、博覧会場と外部とを遮断し、その壁に山岳樹木などを描いて、庭園の背景とした。平和園の写真の多くにこの高壁が写っているが、白黒写真のためか、一見して描かれた壁とは分からない。

この背景の高壁と池の間には築山が2か所設けられ、一つは高さ15尺（約4.5m）で、頂上にはカエデの大木が植栽され、滝の水源が造られた。もう一つの築山は高さ9尺（約2.7m）で、頂上に小沢圭次郎提案の「園生の宮」が建てられた。

この二つの築山の間で池に臨む位置に水亭が設けられた。

園路の幅は7尺（約2.1m）ないし30尺（約9.1m）で、園内には石燈籠、石造の五重塔、木造の春日燈籠、藤棚、四阿（あずまや）が配置され、適所に樹木や下草が植栽され、池中には蓮、花菖蒲などが筏植にして浮かべられ、その他の平地には各種の草花が植えられ、開期中彩飾された。

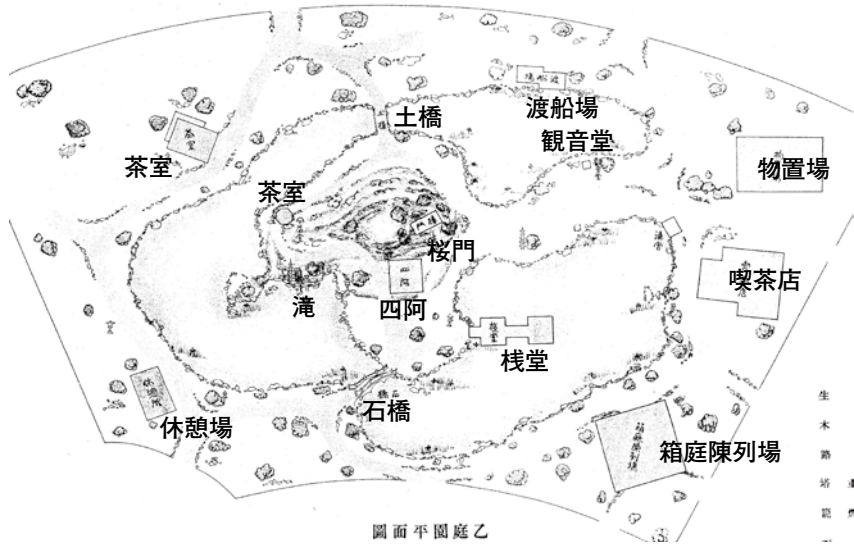


図10 浮島園平面図



図11 浮島園土橋と傘をさす日本女性たち

② 浮島園

浮島園は平和園と全く異なる景趣で造られた。

池の中に突出した半島を中心に、半島には「最も奇抜な」築山が造られ²⁾、頂上には朱塗の楼門を、中腹には滝の水源地を設け、16尺(約4.8m)、幅3尺3寸(約0.9m)の滝を池中に落下させた。滝の隣には岩石のアーチが造られ、アーチと滝壺の中間に石造五重塔が建てられた。



図12 浮島園楼門と滝⁷⁾

別の側面には四阿と傘形茶屋が配がされ、適宜に燈籠が据えられた。

この半島に達するには、幅8尺(約2.4m)ないし12尺(約4m)の園路によるものと、土橋および石橋によって池を渡って達する3本の道が設けられた。

池の面積は720坪(約2380㎡)、その周辺は平庭造りとし、北方(図10の右側)の一隅には日本茶業組合の喫茶店、東京市出展の庭園模型を展示する陳列場、半島の周辺には、池を舟遊する突出した棧堂、漁舎が設けられた。また園の南方(図10の左側)の平地部分には、茶室および休憩所が建築された。

(3) 博覧会後の状況

日英博覧会会場となったホワイトシティは1910年以降も様々な博覧会会場として使用され、日英博覧会のために造成された建築物の多くは閉会直後に撤去されたり売却されたが、日本庭園の平和園(甲庭園)は、撤去されることなくその後も維持された。なお、京都館の勅使門はイギリスのサリー州リッチモンド地区のキュー植物園に、書院はフランスのギメー博物館に移築され、現在も残されている。

ホワイトシティでの博覧会は1914年の第一次世界大戦勃発を機に開催されなくなり、戦時中は、英国軍の収用設備として使用された。

戦後、ホワイトシティが博覧会会場として復興することはなく、その広大な敷地の大部分は



図13 1955年の平和園（背景は建設中のBBCスタジオ）⁷⁾



図14 1955年の平和園（築山は削られ、ロックガーデンに造りかえられている）⁷⁾

ロンドン市に売却されることになった。

ロンドン市は購入した土地を宅地造成や公共施設として利用し、1950年にはその一部をBBC（英国放送協会）に売却し、1952年にはBBCに隣接する日本庭園（日英博覧会平和園）を含む7.5エーカーの土地を、後にハマースミスパークとなる公共のオープンスペースとすることに決定した。

1954年にはその地にテニスコートやグラウンドを整備し1955年にパーク（公園）として正式にオープンした。その後、公園は1971年にハマースミス行政区の所管となり、現在に至っている。

1955年の庭園の写真を見ると、木製の反り橋があった位置には石橋がかけられ、池の周りには水性植物や水辺植物が植栽され、すでに日本庭園の趣が失われていることがわかる。

また、滝のあった築山は削られロックガーデンに作りかえられた。その際、石橋やロックガーデンには「フォレスト・オブ・ディーン」の石が使われたとされている。

（4）現状

現在、池の淵は大型のスゲの仲間（*Carex pendula*）に、水面はショウブ（*Acorus calamus*）やウォータークレス（*Nasturtium officinale*）に覆われ池の形や姿が見えない状況になっている。HS&F区の公園管理担当者の話では、日本庭園としての管理方法が分からないので、でき

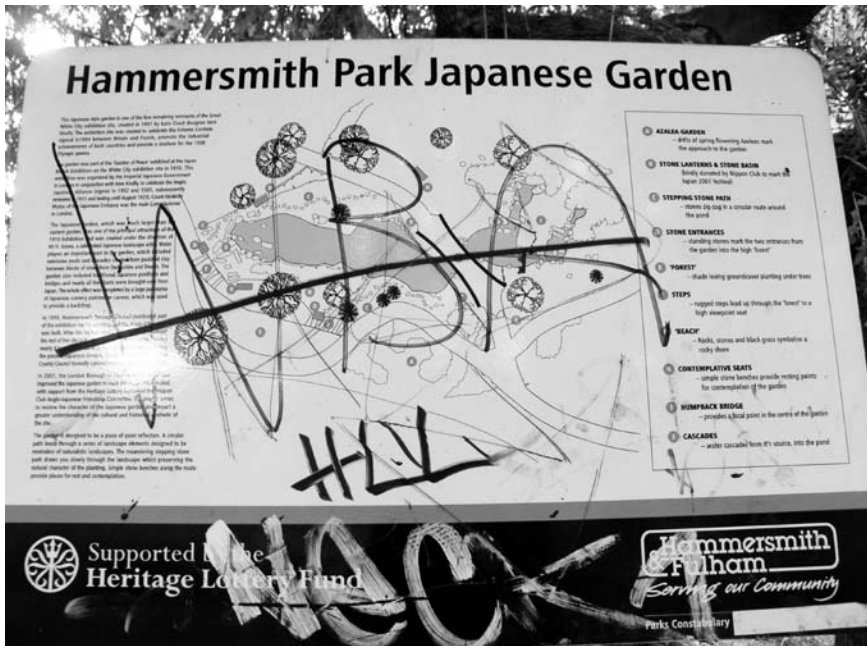


図15 ハマースミスパークの日本庭園看板



図16 草に覆われた池の日本人ボランティアによる草刈り作業（2008年8月）
（背景に見えるのはBBCスタジオの建物）

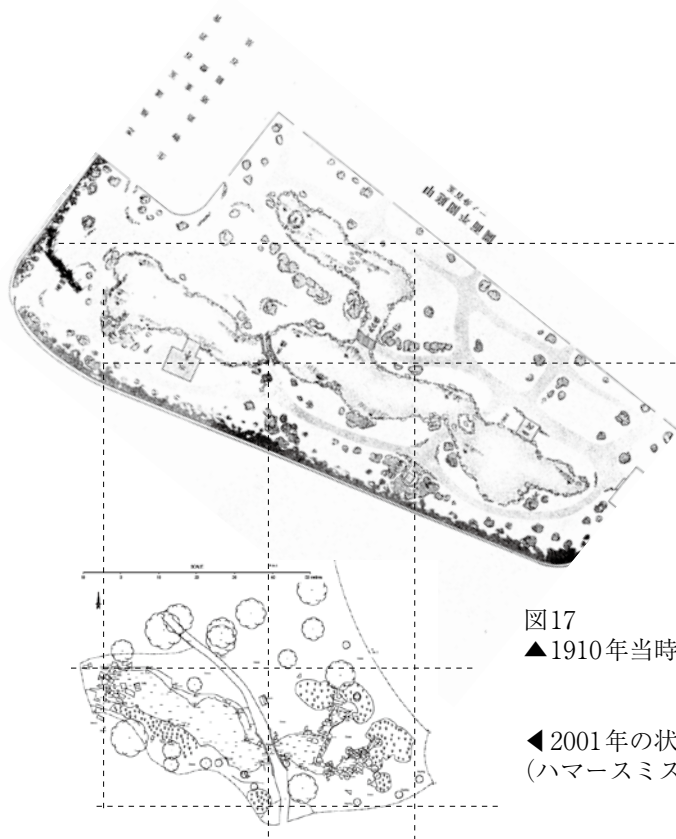


図17
▲1910年当時の「平和園」平面図⁶⁾

◀2001年の状況
（ハマースミス&フラム区提供）



図18 1910年の平和園の石組み⁷⁾



図19 2008年の石組み

るだけ池の植生を残すようにしているとのことであった。そのため、「Japanese Garden」の看板がなければ、日本庭園として造られた池であるとは分からない状況になっている。

現在、庭園の大きさは長さが約100mで、1910年当時の150m長の約三分の二の大きさになっている。日英博覧会の平和園図面と、現在のHS&F区から提供された2001年の図面を比較したところ、1910年当時の南東端部分がなくなっていることがわかった。

また、現在の庭園には表面が平らな砂岩が使われているが、1910年当時の写真を見ると表面に凹凸のある石が使われていたことがわかった。

II. まとめ

1910年の日英博覧会では、日本庭園は浮島園と平和園の2か所が造られ、現在HS&F区のハマスミスパークに残る日本庭園は、そのうちの平和園であることがわかった。

その平和園は、かつては長さが約150mあったが現在は約100mになっており、原因は1910年当時の南東端部分が失われたことによるものである。また、1910年当時の写真と現在を比較すると、当初は池の淵や築山に表面に凹凸のある石が使われていたが、現在の庭園には、表面が平らな石が使われており、これは1954年から1955年の改修工事に際して置き換えられたものと推測されるが、石の産地や置き換えた理由など詳しい記録を入手することはできなかった。

また、現在は現場に「ジャパニーズ・ガーデン」の看板はあるものの、日本庭園としての管理がされておらず、池は草に覆われた状態で、それは、庭園を管理するHS&F区に管理技術が伝えられていないことが主な原因であると判断された。

今回、機会を得て1910年に開催された日英博覧会開催時に造られた日本庭園の存在を知り、調査を行ったが、その過程において、日英博覧会当時の庭園の一部がまだ残されていることを、日本の多くの造園家や研究者に知られていないことを知った。

また、日本庭園はすでに世界中に認められよく知られた存在であり、イギリスには各地に日本庭園が造られていることもあり、管理方法はよく知られているものと思っていたが、ハマースミスパークの日本庭園の草に覆われた姿を目にし、HS&F区の管理担当者と話をして、実はまだよく知られているものではないことを知った。

今後、2010年の日英博100周年に向けて、シンポジウムや展覧会などの開催が計画されるが、その記念事業のなかには、庭園の修復も含まれている。しかし、修復した日本庭園を長く維持管理していくためには、管理者であるHS&F区や、庭園の利用者である周辺住民に日本庭園についての知識や管理技術を伝えることも必須であり、記念事業の中に組み込む必要があることを強く考えさせられる結果となった。

【参考文献】

- 1) 伊藤真美子 (2008) 『明治日本と万国博覧会』 吉川弘文館, pp159-209
- 2) 佐藤 昌 (1986) 「外国における日本庭園 —初期の造園—」造園雑誌49 (3), pp167-188
- 3) 國 雄行 (1996) 「1910年日英博覧会について」神奈川県立歴史博物館研究報告 人文科学 (通号22), pp65-80
- 4) 小林治人 (1995) 「酔園 小沢圭次郎：伝統庭園庇護・継承に生きた『設景家』」ランドスケープ研究58 (3), pp245-248
- 5) リスター・堀田綾子 (2002) 「第12章 1910年日英博覧会の主催者たち」『英国と日本・日英交流人物列伝』博文館新社, pp223-238
- 6) 農商務省編 (1912) 『日英博覧会事務局事務報告』上・下
- 7) ハマースミス&フラム区アーカイブス資料
- 8) Kuitert, Wybe (2002) 「Japonaiserie in London and the Hague: A History of the Japanese Gardens at Shepherd's Bush (1910) and Clingendael (c.1915)」Garden History, vol.30, No.2, Dutch Influences (Winter), pp221-238
- 9) Hotta-Lister, Ayako (1999) 『The Japan-British Exhibition of 1910: Gateway to the Island Empire of the East』 Japan Library
- 10) Raggett, Jill (2006) 「Early Japanese-style Gardens in Britain」Shakkei vol.13, no.2 Autumn, pp6-9
- 11) The Gardeners' Chronicle (1910) 「Japanese Gardening at Shepherd' Bush」The Gardeners' Chronicle, 16 April. p243
- 12) Unwin Brothers Limited (1911) 『Official Report of the Japan-British Exhibition 1910』